アジア、更には中国、日本における舎利奉安信仰の広まりと定着を示す証拠である。

五．結論・展望

上記の結果より、次の二点を指摘できる。

一つは、中央アジアにおける寺院の伽藍配置は三タイプに大別できるという点である。Cタイプに着目すると、ザールデリー、グルダラ遺跡のように山間部の台地上に建造されることが多く、明らかに遺跡の立地が関連している。都市遺跡内にある寺院は、一般民衆の参拝も想定される。それ故ストゥーパを中心に祠堂が巡り、参拝者の順路を規定していたとも考えられる。一方山間部に位置する寺院では、石窟寺院のように僧侶の修行の場としての性格が強く、礼拝の対象であるストゥーパは他の構造物と離れた位置に置かれている。

二つ目は石窟寺院との祠堂・僧房の位置関係の相似である。石窟寺院において祠堂窟と僧房窟とが分かれているように、地上寺院においてもストゥーパに僧院が付随することはない。これは地上寺院、石窟寺院両者に共通する特徴であり、仏教寺院において両者間に明確な区域の分離があったことがわかる。

今後はストゥーパの立体的な形やレリーフなどの装飾を含めたより構造的な分類や、各地上寺院の石窟寺院との関連性等についても考察を進める。

エジプト先王朝時代の石製品からみた地域間関係

竹野内　恵太

はじめに

本発表は紀元前四千年紀、エジプトの先王朝時代の流通システムを明らかにすることを目的とした。当該期は社会が著しく複雑化し、エジプト各地の諸政体が最終的に統合する過程に特徴づけられる。地域間は交易や交換、戦争といった競合関係にあった。このような地域間の相互作用は、各政体の変容とその帰結としての地域統合を促進させた。地域統合の過程についての理解を深めるためには、この地域間関係に焦点を当てるべきである。そのため、本論では交換、とくに流通システムを、すでに産地同定されている泥岩製パレットと玄武岩製容器の二つの石製品から分析した。

一．交換・流通に関する既往研究の検討

近年の先王朝時代の交換・流通研究は、上下エジプト間や、南レヴァントや下ヌビアといった外部地域との交易に焦点が当てられてきた。このような研究は、地域間における遺物の移動を総合的に捉えたものとして評価できるものの、巨視的な地域的枠組みに依拠するあまり、上下エジプト地域内部の交換関係に関する分析は十分と言えない。加えて、定量的な分析を欠いていることも、分析と議論

がさらに微細な地域的枠組みを対象にできない要因であろう。そのため、本発表では、考古学において一般的な交換研究の手法を援用し、定量的分析から当該期の流通システムの実態を検討する必要があった。

二．対象資料と分析方法

このような問題を解消するためには、製品の素材の産地が明らかであり、統計的な分析に耐え得る資料が不可欠である。そのため本発表では、対象遺物として泥岩製パレットと玄武岩製容器を取り上げた。両石製品は、ほぼ全てが泥岩を素材とし、主に副葬品として土壙墓から出土する。泥岩の産地は、化学分析によって上エジプト地域の東部砂漠に位置するワディ・ハンママートであることがわかっている。一方、玄武岩は下エジプト地域のファイユーム地方北部に産地があり、これも化学分析から明らかとされている。つまり、この二種の石材は産地が対極的な位置であり、なおかつその製品は対向的流通にあったと考えることが妥当である。これら泥岩製パレットと玄武岩製容器の①産地からの出土量の地理的推移、②地理的推移の回帰分析、③全体の墓数と対象遺物が出土した墓数の割合、④形態の分布を上エジプト地域と下エジプト地域に区分して分析を進めた。上エジプト地域については、さらにナカダ地域、アビュドス地域、バダリ地域と細分した。なお、時期については、ＩＣ期・ⅡＡ－Ｂ期・ⅡＣ－Ｄ期・ⅢＡ－Ｂ期の四期に分けて、経時的な変遷を追った。出土量の地理的推移やその回帰分析、形態の分布といった分析方法は、交換研究の一般的な手法であるため、流通システムの実態を考える際に有用性が高い。

三．分析結果・考察

ＩＣ期：出土はナカダ地域が中心であり、ナカダ遺跡から回帰曲線は下降する。しかし、全墓数対出土墓数の割合は遺跡間でモザイク状であり、距離との相関は見られない。形態については、ナカダ地域とアビュドス地域それぞれにおいて排他的な形態があって、地域差が認められた。

ⅡＡ－Ｂ期：前時期と同様にナカダ遺跡が出土の中心であり、そこから離れるごとに回帰曲線は下降する。一方、割合は地域内それぞれの大規模遺跡（政体の中心遺跡）において高い割合を示す。また、形態はナカダ地域とアビュドス地域の間で地域的差異は消失する。一方、バダリ地域で排他的な形態が当該期において認められた。このバダリ地域で排他的な形態とは、前時期ではアビュドス地域で排他的なものである。つまり、アビュドス地域とバダリ地域間で情報の経路があったことを示し、ナカダ地域によってバダリ地域まで流通が管理統括を受けていなかったと考えられる。この時期まで玄武岩製容器は、マアディ遺跡で出土する器形をもち、また当遺跡を中心とした出土を示す。

ⅡＣ－Ｄ期：当該期になると、バダリ地域において出土量が減少し下エジプト地域で増加するため、回帰曲線は一端バダリ地域で下降し、下エジプト地域へ上昇して延びるラインを描く。また、上

エジプト地域にのみ出土している形態は若干数あるものの、基本的には上下エジプト地域間で差異は見られないと言ってよい。また、ⅡA－B期までナカダ地域に特化していた形態は、この時期に全域で普遍化することも、地域差の消失を物語る。当該期からマアディ遺跡の廃絶とともに、上エジプト地域様式の器形に取って代わり、出土量の地理的推移も上エジプト地域が中心となる。ⅢA－B期：出土の中心は下エジプト地域のタルカン遺跡に移り、形態の地域差は完全に消失する。上エジプト地域では、ⅡC－D期までとは圧倒的に出土量が減少する。この時期になると、上エジプト地域へ玄武岩製容器の集中は変化ないものの、出土個体数自体が大幅に減少する。

四、結論

以上の傾向をまとめると、①ⅡA－B期における政体領域の形成に導かれた階層的なナカダ地域およびアビュドス地域の階層的な流通システムの形成、②ⅡC－D期のバダリ地域の出土量の減少に伴う下エジプト地域指向型の流通システム、③下エジプト地域への権力移動に伴う遠隔地への原材の流通、である。先王朝時代における流通システムは、上下エジプト間では既往研究で指摘された交換システムの変化と合致したが、上エジプト地域内部という従来のものより微細な地域設定からも遺跡間および地域間における流通システムの経時的変化が認められた。

▽公開講演会要旨

「海域」から見る琉球王国の旅役

―「大和旅」を中心に―

矢野　美沙子

琉球は交易国家であり、古琉球時代は「大交易時代」であったと一般的に理解されている。『海東諸国紀』所収の地図資料などから、十五世紀半ばの段階で、〈琉球→奄美大島海域→七島海域→坊泊（坊津・坊泊）→松浦（上松浦・下松浦）→博多〉という航路が成立していたことが確認でき、琉球と日本の間で、海域をまたいだ船舶の往来がなされていたことが分かる。

交易国家としての首里王府を象徴するシステムが、ヒキ制度と旅役制度である。ヒキは、軍事的・交易体制的・行政的性格を有する古琉球独自の組織編成であり、「地上の海船」として、航海体制をモデルに設定されたところの一定の職制を備えた編成組織であった。旅役制度は、琉球の家臣団編成システムであり、貿易と土地所有を相互に結びつけ、「旅役」を奉公の基準とするものである（真栄平房昭「琉球における家臣団編成と貿易構造」藤野保編『九州と藩政（Ⅱ）』国書刊行会、一九八四年）。この旅役の原型は、古琉球時代から成立していたと考えられる。本報告では、旅役の一環である「大和旅」（日本へ派遣される旅役）に注目し、琉球王国の「海